

## 非認知的スキル

2023・4・13 重枝 一郎

授業では、知識や技能、論理的に考える力、主体的に学習を進めようとする意欲や態度の育成が主目標とされる。よって、評価において「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」に示される。

この3つのうち、前2つは認知的スキルという。また、3つ目は「やる気」「熱心さ」「自信が持てた」等の生徒の姿に見ることになる。これを「非認知的スキル」という。

ノーベル経済学賞を受賞したヘックマンは、子どもの成長にとって、非認知的スキルの育成が重要な要因になることを指摘した（2015）。また、OECDも同様の視点から「認知的スキルと相互作用して、お互いを刺激し合い、子どもたちの今後の人生においてプラスの成果を成し遂げる」と指摘している（2018）。

主な非認知的スキルについては、これまでの「校長研修だより」でも多少は書いてきた。表にしてみる。

非認知的スキル	概要
自己効力感	できる自分、自分の有用性を、活動を通して実感すること （本校のシンボルワード「大切なひとり」につながる）
成長的思考態度	自分は頑張ればできると考えて活動しようとする事。 反対が固定的思考態度で、能力は決まっているので頑張ってもできないと捉えること。 （成長型マインドセットと硬直型マインドセットの話）
粘り強さ	強い意識や意欲のもとで活動を進めようとする事。
熱意（GRIT）	目標に向かって活動を進めようとする事。
感情や行動の抑制 （self-control）	目標達成のために、感情や行動を抑制すること。
レジリエンス	困難な状況に遭遇しても、回避し、次に向かおうとすること。（50号「マインドセット」、91号「レジリエンスの獲得」）

確かに、非認知的スキルを評価することは難しい。ただ、私たちは学習指導する上で、この非認知的スキルを融合させている。つまり、私たちは、認知的スキルに非認知的スキルを加えることで、学力の内実の拡充を目指しているのである。指導改善において、「今生徒は何ができて、次に何をしたいと思っているのか。そのために障害になっていることは何か」ということを判断基準にすることが大切である。この視点は、教育相談や特別支援教育では従前より明確にされている。つまり、この視点に立った授業づくりをしていくことが大切になる。